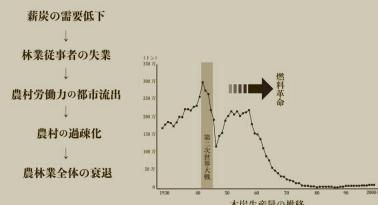
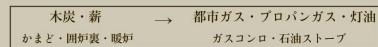


社会 —もりであう—

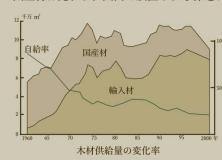
森と人の関係の希薄化 ~林業衰退の流れ~

1. 燃料革命の到来 (1950年代)



2. 伐れば赤字、出せば赤字

1960～1970年代 戦後復興の木材需要増に伴い、拡大造林政策。
苗木から柱材が取れるまでに30～40年必要(今、収穫期が放置)
その間の1960年代後半より、輸入材が大量輸入。
建築様式も変化(プレハブ、2×4、鉄筋、コンクリート)
求められる木材も変化し、品質は劣るが安い輸入材が普及。
国産材は売れず、国内で放置される林地が増加。



共に新陳代謝する、社会と森へ。

この世は諸行無常である。社会も、森も絶え間なく写り変わっている。古いものは次第に去り、新しいものがこれに代わっていく。つまり、社会も森も「新陳代謝」しているのだ。しかしどうだろう。放置された森と多くの問題を抱えた社会、その新陳代謝はスムーズでない。そこで私たちが目指すのは、森の「生きた力」を取り戻し、その森に社会を結びつけたまちだ。そこでは森と社会の2つの新陳代謝が1つの新陳代謝となる。私たちは、森には社会を変える力があると信じている。「社会」に木が入ることで生まれる、「社会」。私たちは、そこで新たな何かに「であろう」だろう――

対象地 — 山梨県北杜市

市域の76%が森林

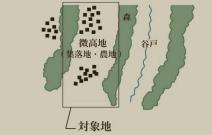
【森林・林業の現況】

- ・樹木の高齢化
- ・既に利用可能だが低下する蓄積量
- ・徐々、開伐面積は低下
- 放置林多くマツクイ虫被害
- ・燃料革命前の薪炭利用で抑えられていた遷移が進行
- ツルの巻きつき、枯木枯枝の放置などの荒廃

【住民の意識】 H17「まちづくり市民アンケート」

- ・居住意向の理由2位
「自然が豊かなから」
- ・描く市の将来イメージ2位
「自然と共生する美しい町」
- ・参加したいまちづくり活動1位
「自然保護・愛護活動」

【森と集落の地形的関係 (ハナ山南斜面エリア)】



森と微高地が交互に南北に伸びる特徴的な地形。森に包み込まれたような集落。

【地域コミュニティの変化】

- ・着実に進む高齢化
- ・転入者の増加
- ・非農林業就業の増加

【現地へ行き 感じたこと】

- ・森と集落が完全に分断
- ・森は鬱蒼としていて近づき難い
- ・昼間でも人が少ない



「森に暮らす」というあたりまえ。

森と集落を分けない。

空間を目的ごとに分けない。

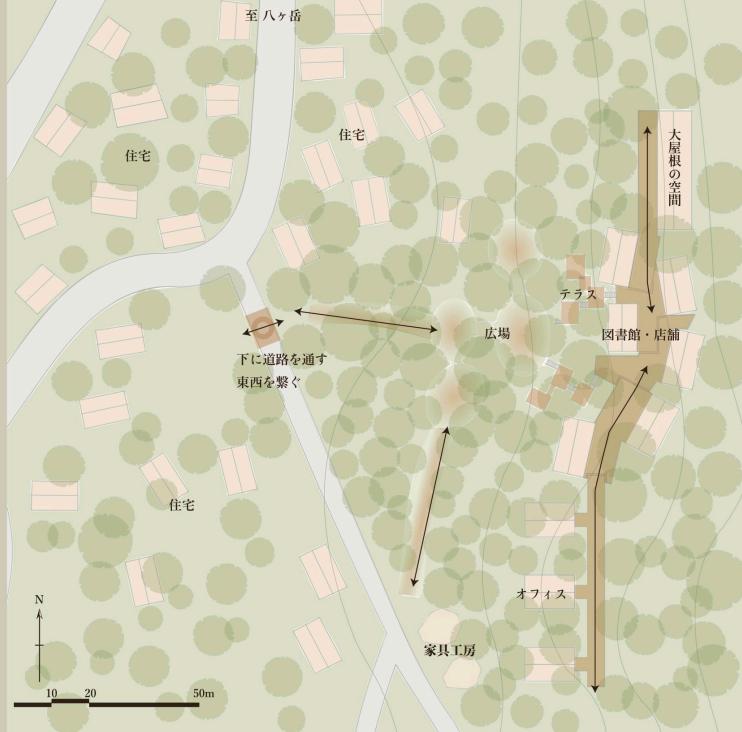
さまざまな人が、同じ場所でさまざまなことをする。

遊ぶ子どもたちの近くに、働く大人の姿がある。

木を伐る人、パソコンで仕事をする人。

毎日、いろいろな人・モノとの「あい」がある。

そんな場所。



木を育て、活かす ~木材の多段階利用~



- ・住宅や公共施設に森の木材を使用
- ・薪ストーブ設置などの推進
- ・残材、廃材などもウッドチップに加工し、舗装に利用

移り変わる住民と住まい



- ・オフィス誘致などに伴い、転入者も増えると見込まれる
- ・空き家をうまく活用(空き家バンク制度など)

大屋根の空間



森とまちへ開かれた、大きな屋根と柱が印象的な空間。この建物は特定の目的のためのものではない。みんなでご飯を食べたり、勉強や仕事をしたり、イベントを行ったり、時代や住む人々によってその使われ方は変わってゆく。

オフィス



今、都会にオフィスがなければならぬ理由はあるだろう。現代は、インターネット環境が整っていれば大抵の仕事はできる。また、このストレス社会において、オフィスこそ自然の近くにあるべきではないか。

家具工房



この森の木を使い、その森の中で作られる家具をこの地のひとの名物にし、木を伐り、活用するというサイクルを取り戻す。また、その家具を森の他の施設に置き、実際に使ってもらうことで良さを感じてもらう。

図書館・店舗



図書館で本を借り、カフェでコーヒーをティーアウトして、木陰でくつろぐなんてことも。

住居エリア



家々を隙などで区切らず木々で囲むようにすることで、適度な開放感と囲繞感を生み出す。

育まれる「社会」



時が経つにつれて木々は成長し、まち全体が森のように成長する。

